

講演

なすびの花

麩商 半兵衛麩
11代目当主

玉置半兵衛



昨年10月10日の「おてつき文化講座」の要旨に加筆して採録しました。

●お金も家も信用も無い、無い無い尽くして商売始めて

最初におことわりしておきますと、代々、京都で商いをしていますので、私はベタベタの京都弁で話します。ご容赦ください。

本日のタイトルはなぜ「なすびの花」となったか、述べておきます。「親の意見（忠告）と、なすびの花は、千に一つも無駄がない」と教えられました。なすびは、花が咲くと必ず実を付けます。親の意見と一緒に、と思っっているからです。実際、若い時には、親の意見を「うるさいなあ」と思うこともしばしばでしたが、この歳（86歳）になりますと、「一つも無駄のない教えやったなあ」と痛感し、表題とさせていただけでした。

玉置家の先祖は、熊野三山から神武天皇が東征の際、八咫鳥に導かれた玉置山に由来しています。天から玉（隕石）が砂地に落ちたさまが糺に似ているところから、玉置神社の紋が糺紋になりました。私の家の菩提寺の古いお墓に彫られている「玉置氏・糺紋」が同じで、神代から玉置一族であったと認定されています。玉置家系図によりますと、鶴城や手取城の城主で、代々が大膳職を務め、帝の警護もしておりました。

半兵衛麩は、今から330年ほど前の江戸時代、元禄2（1689）年には商売を始めます。ただ、初代半兵衛のころは、たいへん苦労したようです。お金は無いし、家は無いわ、信用も無いし、の無い無い尽くして、唯一あるのは「やる気」だけ。この「やる気」だけで始めた商売でした。京都御所で習った麩づくりを家業として立ち上げたわけでした。

しかし2代目は創業者の苦労をみて、麩の家業は嫁に任せ、自分は三味線の師匠で生計を立



玉置半兵衛（たまおき はんべえ）

1934（昭和9）年京都市生まれ。本名は玉置辰次。1953年、麩商第11代目当主、玉置半兵衛を継承。家業の麩製造販売を時代の変化に合わせ、株式会社化する一方、伝統と家訓を大切に、江戸時代に広まった石田梅岩の商人哲学（石門心学）を日常生活の中で代々伝え、実践する。協同組合全国製麩工業会理事長、京都経済同友会幹事など歴任し、文部教育賞、京都市教育功労賞受賞。著書に「あんなあよおうきぎや」（京都新聞出版センター）。